

家族農業経営における後継者の妻の農業及び家事従事のあり方

河 野 あけね

(宮城県農業センター)

Actual Conditions of Younger Farm Wives' at Agricultural Works and Household Matters
Akene KONO

(Miyagi Prefectural Agricultural Research Center)

1 は じ め に

本県農業の大部分は、家族労働力にもとづく小経営によって支えられている。従って、農業生産の維持・向上のためには、こうした個別農家の経営の存続を図る必要がある。現在でも、本県では後継者夫婦が親と同居し、家を継ぐという形が一般的であるが、農業経営の存続という意味からみても妥当性がある。しかしながら、農村においても個人主義・核家族志向が強まりつつあり、多世代が同居している農家においては、家族関係、特に母と後継者の妻との間の関係は難しさを抱えている。ここでは、農業経営の円滑な継承という視点から、特に後継者の妻の自家農業への従事と家事従事の実態調査を通じて、農家運営上の留意点を探ろうとした。

2 調 査 方 法

県内の全農業改良普及所を通じて、1普及所当たり7戸の多世代同居農家の選定と、アンケート票の配布(昭和60年7月中旬)、回収(同8月上~中旬)を行った。その中から経営主夫婦が50歳代、後継者夫婦が30歳代の家族周期にある3~4世代の直系家族のみが同居する農家をすべて抽出し、その後継者の妻(72名)を、調査対象者とした。

3 結 果 及 び 考 察

調査対象者を、自家農業へのかかわり方から下記の4類型に分けた。()内人数は類型別内訳である。A類型:部分的にせよ自分が主体になって農作業に従事する(20名)。B類型:自分は基幹労働力ではあるが、主導権はない(29名)。C類型:他の人の指示に従って補助的作業をする(16名)。D類型:たまに手伝うことはあっても、原則として農作業には従事しない(7名)。自家農業へのかかわり方は、A, B, C, D類型の順に小さくなる。この類型別にみた農家の特徴は、表1のとおりである。後継者の妻が自家農業に大きな役割を果たしているのは、比較的規模が大きく、農業に力を入れている農家であるが、特に、後継者世代に農業が任されている場合には、後継者の妻の主体性が高いことがわかる。逆に、農業の規模の小さい兼業農家では、家族周期にもよるが、親が農業を担当する場合が多く、経営規模が小さくなるほど、後継者の妻は農作業には従事しないことが多くなる。調査対象者と義母の年齢及び従事状況との関連をみると、A, B, C, D類型の順に両者の年齢は若くなっており、後継者の妻の農外従事の比重が高まることがわかるが、逆に義母の農作業従事は多くなっており、両者の間には補完関係が認められた。

表1 類型別農家の特徴

類型	平均農業所得 (円)	兼業率 (%)	水稲単一経営農家割合 (%)	農作業分担状況別農家戸数 (戸)				平均家族員数 (人)
				分担有	親世代のみ	子世代のみ	分担無	
A	530	50	10	6	—	9	5	7.7
B	600	52	7	10	1	5	13	7.0
C	440	69	31	2	2	3	9	7.3
D	360	100	43	1	5	—	1	7.3

注. 1) 農業所得は、営農類型・耕地面積等から試算。

2) 水稲単一経営かどうかは、調査対象者の回答と農業改良普及所からのききとりによって判定。

また、後継者の妻が、自分の農作業従事量についてどう感じているのかをみると(表2)、いずれの類型でも現状を「適当」と認めている人が半数を越えたものの、感じ方には類型ごとに少しずつ差があった。A, B類型では「多すぎる」、逆にC, D類型では「少ない」という声が多い傾向があったが、これは従事の実態との対応とみられる。しかし、「多すぎる」という人たちの多くは「がんばらね

ば」と答えているし、「少ない」と答えた人も「もっとやりたい」との希望をもっており、後継者の妻は決して自家農業を忌避しているわけではなく、概して積極的であるといえよう。自家農業への姿勢をみても、農作業従事上の立場の違いが反映するが、やはり積極的であった。

次に、家事従事の様子をみてみた。朝食準備や家の中の掃除、洗濯、食後の片付け等13種類の家事項目ごとに、

表2 後継者の妻の農作業従事量についての感想

単位：人、(%)

類 型	多すぎる		適 当	少 ない		
	減らして ほしいね	がんばら ば		もう少し 任せて ほしい	もっと 任せて ほしい	従事して いないが やりたい
A	1 (5)	6 (30)	12 (60)	—	—	—
B	2 (7)	11 (38)	16 (55)	—	—	—
C	—	3 (19)	12 (75)	1 (6)	—	—
C	—	—	4 (57)	—	1 (14)	2 (29)

(1)いつもする, (2)大体する, (3)半分ぐらいする, (4)たまにする, (5)しない, のうちから当てはまるものを選んでもらい, (1)~(5)に対して5点~1点を与え, 13項目の合計点数を家事従事量とした。全類型に共通して従事量の少なかった家事項目は屋敷の片づけ・草とり, 次いで漬物作り, 風呂炊きであり, 一般的に高齢者の仕事とされているものが

多かった。従事量の最も多かった家事項目は, 夕食後の片づけであった。また, 朝食準備については, 全般に従事程度は高く, その中でC, D類型では高く, A, B類型は低いという特徴があり, 農作業従事との関連が考えられた。同様の傾向は, 夕食の準備についても認められた。なお, D類型については, 朝食後の片づけ, 昼食準備と後片づけ, 日常の買物への従事量が少なくなっているが, これは農外常勤者の多いことと関連があるとみられる。全体としてみると, 家事従事量の多いのは, B, C類型であり, 次いでA類型, D類型の順に少なかった。家事についても, 義母との補完関係が認められた。

後継者の妻の家事従事への印象をみると(表3), 農作業従事と同様, 従事量の多い人は負担感が強くなる傾向があった。ただし, 類型ごとに次のような特徴があった。A, B類型は農作業には基幹として従事するものの, Aは主体的, Bは従属的という立場の違いがあり, A類型はB類型に比べると僅かではあるが, 農作業負担感も家事負担感も低かった。C類型は, 農作業には補助的にしか従事しないが, 家事負担感はA, B類型よりも更に強い。これには,

表3 後継者の妻の家事負担感と1人当たり家事従事量

単位：人、(%)

負 担 感	A 類 型		B 類 型		C 類 型		D 類 型	
	人 数	従事量	人 数	従事量	人 数	従事量	人 数	従事量
多	1 (5)	4.31	1 (3)	3.15	1 (6)	4.31	—	—
す	—	—	3 (10)	4.36	3 (19)	3.79	—	—
ぎ	5 (25)	3.86	4 (14)	3.73	4 (25)	3.77	4 (57)	3.35
る	14 (70)	3.25	20 (69)	3.56	8 (50)	3.40	3 (43)	3.18
適	—	—	1 (3)	3.23	—	—	—	—
当	—	—	—	—	—	—	—	—
少	—	—	—	—	—	—	—	—
ない	—	—	—	—	—	—	—	—
平 均		3.46		3.64		3.62		3.28

実際の家事従事量の多さとの対応もみられるが, 農作業には全く従事しないD類型では, 実際の家事従事量は最も少ないにもかかわらず, 家事従事量を「適当」と答えた人の割合は最も低かった。

以上のことから, 後継者の妻が, 自家の農作業に一定程度参加することによって, 家族の一員としての一体感が強まり, 家族のための家事従事を苦痛と感じなくなるのではないかと考えられた。ただし, 農作業への従事の仕方がポイントで, ある程度の責任, 主体性を持つことによって, 更にこの効果が高められるものと考えられた。後継者の妻の自

家農業への参加意欲は決して低くはないのである。農作業と家事とは, 仕事の内容では全く異なるものではあるが, これを分離させてしまえば, 家としては続いていても農業生産を引き継いでいくことはできなくなるのではないかとと思われる。生活の中に両者をうまく組み合わせ, 組み込んでいく工夫が必要と考えられる。

ただし, 今回の調査では調査対象者数が少なかったため, 更に数をふやして検証することが今後の課題として残された。